

2008.9.30 国土交通省

国土計画における農村地域と 自然再生の課題と展望

慶應義塾大学環境情報学部 一ノ瀬友博

自己紹介

- ・東京大学農学部緑地学研究室出身
- ・学位は鳥類の保全生物学的研究
- ・2年間ミュンヘン工科大学へ留学
- ・9年間淡路島で教育研究（兵庫県立大学自然・環境科学研究所／淡路景観園芸学校）
- ・1年間マン彻スター大学で客員研究員
- ・4月より慶應義塾大学環境情報学部

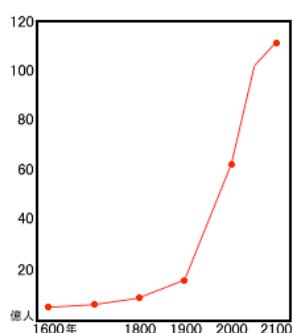
私の研究テーマ

- ・都市域における生態的ネットワーク構築
- ・農村地域における生物多様性保全
- ・都市及び農村地域における景観の変遷
- ・中山間地域における戦略的再構築
- ・農村計画の視点からの広域計画

http://homepage.mac.com/tomohiro_ichinose/

日本が直面する課題

- ・グローバルとローカルが摩擦を生む時代
- ・世界人口の爆発と日本の人口減少



世界人口の推移と予測（国連WPP1992）

<http://www.t3.rim.or.jp/~kabutoya/KABHTML/Yoi/2-1.html>

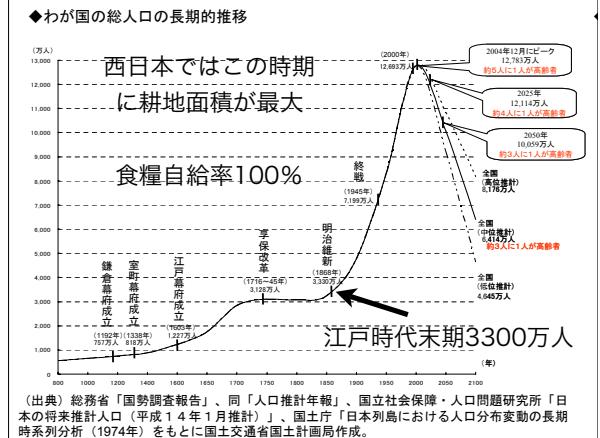
日本が直面する課題

- ・グローバルとローカルが摩擦を生む時代
- ・世界人口の爆発と日本の人口減少

世界的な食糧危機と食糧自給率が低いにも
かかわらず土地を適切に管理できない日本

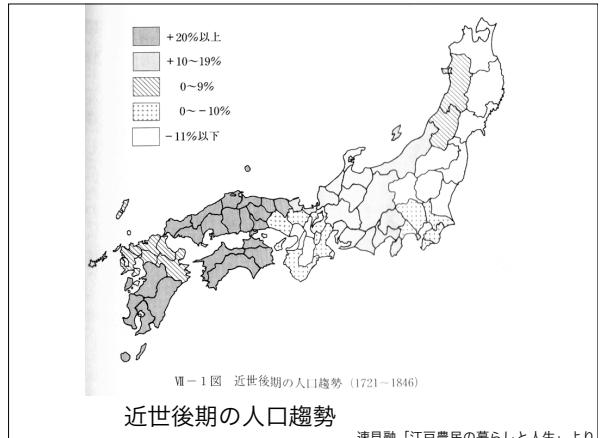
複雑な環境問題

- グローバルには、温室効果ガスの増加による地球温暖化
→低炭素社会実現の必要性
- ローカルには、都市のヒートアイランドと農村における活性化や農業の効率化
- ローカルな対策はエゴになることも
- そもそも人口が減るから解決か？



戻ることはあり得ない

- 一人あたりの消費カロリーの増大
- 農業生産性の向上とともに投入するエネルギー量が増大
- 大きく異なる人口構成と死亡率
- 人口の偏在-人口が増加する大都市圏(首都圏と名古屋圏)



共同研究会「撤退の農村計画」

- 2006年5月から活動開始
- 2006年4月の農村計画学会春期シンポ
- 撤退って何だ？—農村の再構築
- 場当たり的な活性化一辺倒の農村計画から長期的に持続可能な農村地域の再構築
- 現在64名で活動—立場も出身もばらばら

<http://tettai.jp>

ログイン中：-/ノ解友博
プロフィール編集／ログアウト

検索

TOPページ | 記事投稿 | 記事一覧 | 参加メンバー一覧 | サイト内検索 | 検索

記事を投稿する

【ブログのガイドライン】
投稿前にご確認ください

+フォーメーション

+ はじめての方へ
+ 共同研究会紹介flash
+ 記者への一言
+ 共同研究の進め方
+ 報報共有ブログの特徴
+ ブログのガイドライン
+ サイトポリシー

注目記事 (最新5件)

2008/07/01 圖解「撤退の農村計画」・第1回「消極的な撤退」・第2報

2008/06/28 第10回ミーティング

2008/06/27 2008年度住友財团環境研究助成への申請書提出

2008/06/23 平成20年度国土政策関係研究支援事業助成決定

2008/06/22 第10回ミーティングのお知らせ

アーカイブ

カテゴリー一覧

最新記事

スクラップブック：

近畿・中国・四国

関連資料

この人に贈る
関連記事 (新規)

一覧表示

アーカイブ

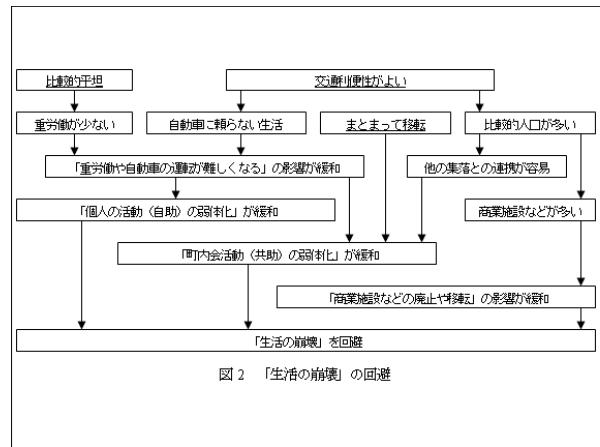
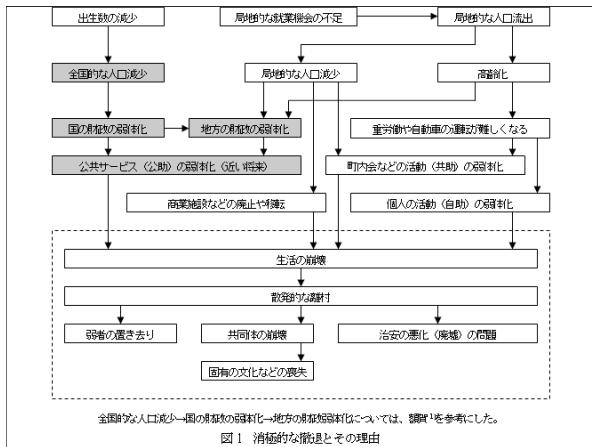
最新の記事 (最新5件)

2008/07/14 濑田史彦 (2002)『国土政策の転換期における地域政策概念の肯定』
前川英城 講義 - 2002年度第37回日本都市計画学会学術論文集、829-834。
(いわゆる) フォント (0)

他の資料

ネタ帳：

2008/07/14 [赤壁お知らせ]シンボジウム「21世紀の関西を考える」 (7月25日)



研究の方向性

- 長期的（50年程度）に持続可能な圏域
- 集落消滅危機の判定と移転推奨段階
- 集落移転後の跡地管理—自然再生と獣害
- 文化・歴史や信仰の維持
- 医療や教育などQOLの維持

国土政策研究助成

「集落限界点評価手法と持続可能な流域圏の構築」

国土政策研究の構成

文献による事例収集	アンケートによる社会的限界点把握	集水域を基盤とした持続可能な圏域の設定	移転跡地や耕作放棄地の管理と自然再生
-----------	------------------	---------------------	--------------------

古くて新しい圏域論

- 1977年三全総-定住圏構想
- 国土のグランドデザイン-多自然居住地域
- 国土形成計画では-コンパクトシティ？
- 共生居住地域-多自然居住地域の発展型
- 流域圏-物質循環や持続可能性の議論
- 総務省一定住自立圏構想

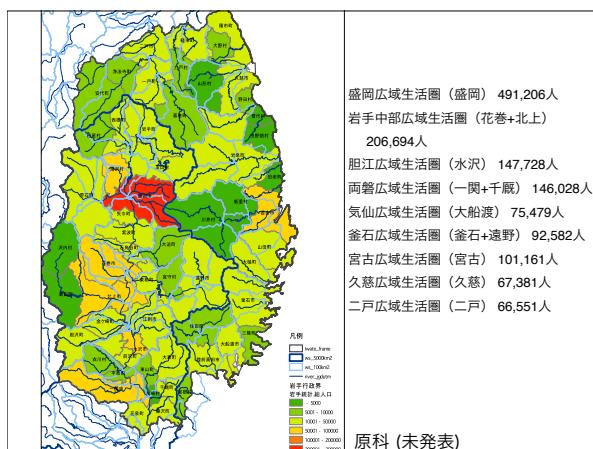
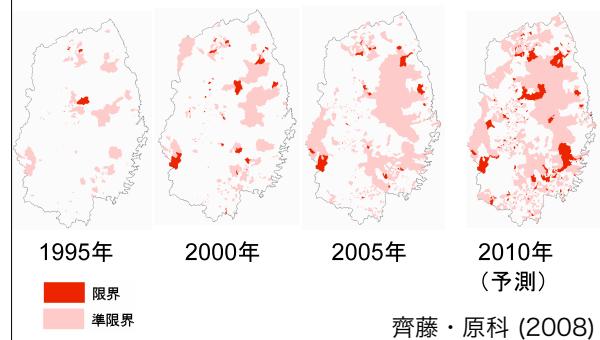
圏域についての考え方

- 「自立」ではなく、社会的・自然的な持続可能性（サステイナブルリージョン）
- 地方都市を中心とした圏域
- 社会的-50年程度の人口予測に基づく文化的-歴史的な圏域や生活圏
- 自然的-流域及び集水域単位に基づく

卷域の課題

- ・ 短中期的に一定の人口が維持できない
(既にない) 地域→自立できない？？

岩手県の集落の限界化予測



卷域の課題

- ・ 短中期的に一定の人口が維持できない
(既にない) 地域→自立できない??

県庁所在地を始めとした中都市との連携
医療・福祉における支援が必要

卷域の課題 2

- ・様々な状況の変化に対応しなければならない土地利用計画
高度成長期時代-人口の急激な増加
人口減少時代-耕作放棄地、低利用地の増加
グローバルな変化
-バイオエネルギー、食の安全
 - ・変化のトレンドは一定ではない-重大な問題

生物多様性の危機

- ・第三次生物多様性国家戦略
 - ・人間活動による生態系の破壊
 - ・里地里山における人間活動の減少
 - ・外来種による生態系の攪乱

利用とマネジメント

- いかに規制するかから、いかに利用あるいはマネジメントするかへの変化
- 今までと全く同じに管理は不可能！
- 見捨てられる、忘れられるが最も問題

地域に応じたいくつかの選択肢

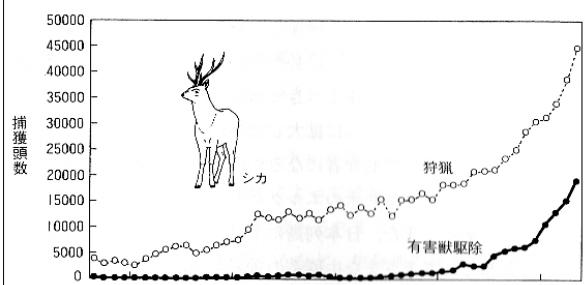
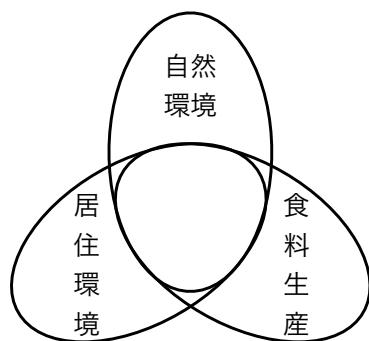


図 7-4 シカの狩猟および有害駆除個体数の変化。1980 年代以降、狩猟、駆除個体数とも急激に増加している。『狩猟統計』をもとに作成。

樋口広芳「保全生物学」

最も野生動物が多い時代（梶, 2008）

農村空間の3要因



3つのオプション

- 農業生産ができるだけ維持
- 農地を維持する粗放的な管理
- 積極的な再自然化（一次自然へ）
- 地域に応じてこれらの組み合わせ

土地利用のタイムスケール

- 1万年-地学的タイムスケール
→沖積低地に都市を造るべきではない？
- 1千年-生態的タイムスケール
→特定の文明が継続して存続できない
- 100年-人間的タイムスケール
→100年経てば歴史的遺産
50年から100年持続することが目標

適切な利用の判断

- 自然立地的土地利用の必要性
土地の立地特性に基づく土地利用計画
- 自然環境のホットスポット診断
適切な生態的ネットワーク構築
- 過去の土地利用をレファレンスに
昔には戻れない、しかし昔のワイスユースを知る必要性

今日触れていない問題

- ・コンパクトシティと撤退の農村の狭間
都市のフリンジ
- ・開発型カオスから撤退型カオスへ
- ・自然環境と居住環境が折り合える場所と
して再整備の必要性
- ・沖積低地は農業生産の場へ転換？

おわりに

- ・自然立地的土地利用計画-適地評価
- ・100年前を知り100年後を考える
- ・価値観のダイナミックな転換
- ・グローバルとローカル、個益と公益のバ
ランスを取れる人材の育成
→慶應大学「社会イノベーター育成」